

# 『ラグビーの世界をデザインする： ワールドラグビーの歴史とその仕事』

松島剛史\*著、晃洋書房、2024 年

三 谷 舜†

## I. はじめに

「ワールドラグビーはなぜ誕生し、どのように発展していったのだろうか。その中で、どのようにラグビーの世界を作ってきたのだろうか」(1 頁)。本書は、このような問いのもと、ラグビーがどのように世界的なスポーツとなったのか、その組織的發展と文化的変容を追いながら、スポーツ文化やその統治のメカニズムに迫るものである。本書の特色は、帯に示された「グローバル化を制御するワールドラグビーの戦略と技法」、「ラグビーは時代や社会と関わりながらどのように作られてきたのか。世界的なゲームに至る過程と仕組みを辿り、スポーツをめぐるコミュニティと市民社会、公共性について考える」という記述に代表されるように、「ラグビー研究」の枠組みにとどまらない、スポーツに内在的な価値とその創造の力学の研究であり、さらにそこから演繹される、社会における組織と文化の関係、を紐解く研究と言えるだろう。そこで本書評は、本書が提示する成果と貢献に触れることを目的とする。以下、本書の概要を紹介する。

## II. 本書の内容

はじめに

1 章 ワールドラグビーの誕生と構造

2 章 ワールドカップとラグビーの世界の統一

3 章 ラグビー憲章とゲームのグローバルな制御

4 章 ゲームの均質化を補完する公認マッチオフィシャル制度

5 章 ラグビーワールドカップ 2019 とオリンピック・レガシー

6 章 ラグビーワールドカップ 2019 の有用性とレガシーの拡張

7 章 ワールドカップを通じたネイションの形成とダイバーシティの推進

8 章 ビデオ判定技術を通じたゲームと観戦経験の変化と制御

補論 ラグビーという共通世界の生成と変化を理解する

おわりに

---

\* 立命館大学産業社会学部准教授

† 中京大学スポーツ科学部任期制講師

s-mitani@sass.chukyo-u.ac.jp

本書は以上の構成である。著者は1章から4章を第1セクションと位置付け、ワールドラグビーを中心にゲームを統治する仕組みの形成プロセス、ゲームの普及を進めるプロセスを検討している。

1章では、ラグビーの誕生とその世界的な拡大の歴史を概観し、イギリスにルーツを持つラグビーという競技が、国際ラグビー評議会という現在のワールドラグビーにつながる国際組織を作り、展開していく過程について、1970年代以前に焦点化して論じている。

2章では、1970年代以降の国際ラグビー評議会が実施した国際的な普及と振興と、それに関連する周辺の組織がいかにラグビーのグローバルな統治体制に組み込まれていくかを整理している。

3章では、国際ラグビー評議会が1997年に策定したラグビー憲章により、柔軟かつ恒常的にゲームを均質化する仕組みを整備する過程に迫っている。ここでは、ラグビーのスペクタクルを「ラグビーらしさ」という観点から創り出す様にも触れている。

4章では、国際ラグビー評議会が1990年代半ば以降に進めた「公認レフリー制度」により、ラグビー憲章を介したゲームの均質化を「支える」主体の形成から補完したことを描いている。それは、新興国の「未熟なレフリング」をラグビー主要国の水準に引き上げる施策でもあったことに言及した。

これ以降の第2セクションでは、2019年に日本で開催されたラグビーワールドカップを題材に、現代ラグビーが日本で受容され、展開されていく様子を描き出した。

5章では、ワールドカップ日本大会が、レガシー計画により図られた、アジアおよび日本におけるラグビーの普及と振興の内容と方法を明らかにした。メガスポーツイベントの「レガシー」とは、国際オリンピック委員会によるものであり、本章はレガシー概念をオリンピック以外のメガスポーツイベントに拡張するという側面も持つという。

6章では、ワールドカップ日本大会を開催するに至る体制や構造を明らかにしている。ラグビーの関連組織のみならず、国家、自治体、企業などのバックアップにより開催に至るのだが、それらを結び付けたのは経済効果や震災復興、都市のブランディング、地方創生など、一見するとスポーツから離れた大きな文脈のものであり、大会はそれを正当化するロジックであることに迫った。

7章では、ラグビーのナショナルチームが社会に与えるインパクトについて、日本代表チームが日本社会に与えた影響から明らかにしている。ラグビーは他競技の代表と選出基準などが異なり、ラグビー日本代表はダイバーシティのアイコンとして日本社会に対して機能することが期待された。

8章では、ラグビーで用いられるビデオ判定システムであるTMO (Television Match Official) が、これまでのレフリー制度や観戦、視聴経験に対して与えた影響を検討している。そこでは、ラグビーの持つスペクタクルさがテクノロジーにより鮮明に見えるようになったことで、現実とハイパーリアルを二重に楽しむ経験の創出に繋がったと論じられた。

補論では、スポーツにおけるグローバル化やその変容、スポーツと公共性をめぐる議論を概観し、なぜラグビーの世界をワールドラグビーの施策を検討することで明らかにしようとしたのか、という学術的な問題関心、背景を開陳している。

### Ⅲ. 本書の意義と今後の展望

本書評を構想するにあたって、本書を読み通してみても、多くの秀でた研究として持ち合わせた独自性と普遍性に触れることができた。ここでは、2つの側面を取り上げる。1つ目は、ラグビー文

化と組織の独自性を浮き彫りにしつつ、広範なスポーツ文化研究や社会学研究へと接続、拡張している点である。本書はラグビーを題材に、組織と文化の関係を紐解いた研究と位置付けることができるが、第1セクションと位置付ける1章から4章では、ワールドラグビーの前身である国際ラグビー評議会の議事録や規約の変遷などを辿ることでラグビー文化の創造と変遷を後づけている。それは、著者が3章のまとめに記したものからも読み取れる。

ここには、ゲームを私的な利益のために利用するような介入も起こりうる商業化と不可分なラグビーのグローバル化という動向の下で、改めて「ラグビーとは何か」を問い、ラグビーにおける「伝統」を再評価する動き、あるいは競技そのものの歴史と共鳴しながら、ゲーム空間を自律的に構成しようとする動きを読み取ることができるだろう。(65頁)

このように著者は自身の作業を総合するのであるが、組織の議事録や規約をもとに、組織の中におけるジレンマや方向性、当時の組織のミッションを照射するのみならず、ラグビーというスポーツ文化が「スペクタクル性」を大切にしながらも、ゲームが世界各地で「均質化」されるようになっていく動態を具体的に明らかにしたことが本書の大きな成果である。また、著者はラグビーを、組織のみならずレフェリングにも視点を置いて検討するのであるが、レフェリングがラグビーのグローバルな「均質化」に寄与することを明らかにした。それは、本書がラグビー文化の中心と周縁を包含した総合的な研究であり、今後の重要な先行研究となることの証左たりうるだろう。

2つ目は、理論的な枠組みと実証的なデータや事実の提示とのバランスの心地よさを感じた点である。補論において、著者がスポーツにおけるグローバル化の枠組みを整理し、ワールドラグビーがラグビーのグローバル化に対して果たした役割や機能の背景を書いているが、著者のスポーツに対する距離感の取り方が垣間見られる。

もしスポーツがローカルからグローバルな次元まで多様な市民に開放され、適切な対話によって合意が積み重ねられ、政治経済システムとの有意義な連携が図られるならば、上記したような「権力を持たない大衆に向けられる：評者補完」スポーツの閉鎖性や私事性は克服され、多様な人びとが共に楽しめるより普遍的な文化へ昇華してゆくかもしれない。ただ、そうした理想的な未来や見立てに賛意を示すことはできるにせよ、市民の主体性や能動性、またスポーツと公共性をめぐってはいくつか留意すべきことも指摘されている。(184頁)

著者は、開放されたスポーツであれば「適切な対話」を積み上げる可能性があり、スポーツはより敷衍された文化として存続する展望を提示している。しかし同時に、スポーツ文化の実践者、支援者、視聴者である市民について、①市民そのものの性質の変容、②スポーツと市民との関係性の非対称性、③スポーツが生み出す経済的・権利的側面と、その公共性とのせめぎ合い、といった3つの観点から、上に整理した「展望」に対する留意点となるとする。これはまさしく、「対話」がスポーツに内在的な価値の創造のための相互行為であると同時に、「対抗」が権力の方向性やスポーツは誰のものか？という公と私のせめぎ合いによる正当性の闘争に表れる相互行為であることを示す。

国際比較研究者の西川長夫は、「われわれは日常的に、日本文化〔……〕等々、文化と国名を無

反省に結びつけて使っている。これは文化の単位を政治的な国境で区切ることを意味するが、そのような文化の単位のとり方は果たして正しいのであろうか」(西川, 2001: 274-275 頁)と疑問を呈する。西川は、グローバル化を念頭に「正しくない」と回答していくが、それは本書において、ワールドラグビーがラグビーの均質化を図った技法を解明する中で見えた「ラグビー文化の差異」と重なる。このように、本書はラグビーを題材にした研究ながらも、文化のグローバル性、その動態の実証研究として、社会学的にも大変重要な視座を提供してくれる。

最後に、1点だけ今後の展望として、著者に示唆をいただきたい点を述べておく。本書はラグビーをその組織の動態から明らかにしたものであるが、実際の選手やレフェリーたちの声が「均質化されたラグビー」にどう影響したのか、またはどう無視されていくのかという点である。つまり、組織を上とした時、下部となる個人による、下からの作用を組織はいかに消化／昇華して、文化に取り込んでいくのか、ということをご伺いしてみたい。

#### IV. おわりに

ここまで本書の概要、意義、今後の展望について駆け足で述べてきたが、紙幅や評者の能力の限界により、言及できなかった点や読み落とした部分も多い。その点については、皆様からのご指摘をお願いしたい。冒頭で触れたように、本書はスポーツに内在する価値とその創造の力学を探る研究であり、社会における組織と文化の関係を解明する研究として位置付けられる。本書を契機に、スポーツに内在する価値を再評価し、社会に投げかける研究が進展することに期待をしたい。

#### 参考文献

西川長夫 (2001) 『増補 国境の越え方：国民国家論序説』 平凡社.